

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和6年1月)

野菜振興部 調査情報部

【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は10万7259トン、前年同月比96.8%、価格は1キログラム当たり250円、同96.1%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万3465トン、前年同月比93.2%、価格は1キログラム当たり222円、同99.1%となった。
- 3月は、全国的に出回り不足となり、特に果菜類が想定より少ないため、価格は2月より上昇し、平年を上回ると予想している。

(1) 気象概況

上旬は、全国的に天気は数日の周期で変わった。冬型の気圧配置が長続きせず、平年に比べ晴れの日が多かったため、旬間日照時間は、東日本日本海側ではかなり多く、北日本日本海側、西日本、東日本太平洋側、沖縄・奄美では多かった。北日本太平洋側では平年並だった。その中で、7日から8日にかけては冬型の気圧配置が一時的に強まり、寒気の中の低気圧の影響を受けた北海道を中心に北・東日本日本海側で大雪となった所があった。低気圧の影響が弱かったため、旬降水量は、西日本、東日本太平洋側では少なく、北日本、東日本日本海側、沖縄・奄美では平年並だった。寒気の影響が弱く、南から暖かい空気が流れ込んだ日もあったため、旬平均気温は、東日本ではかなり高く、北日本、西日本では高かった。沖縄・奄美では平年並だった。

中旬は、冬型の気圧配置が長続きせず、寒気の影響が弱かったため、旬平均気温は、西日本ではかなり高く、東日本と沖縄・奄美では高かった。北日本では平年並だった。その中で、15日から16日にかけては一時的に冬型の気圧配置が強まり、北海道地方を中心に北・東日本日本海側で大雪となった所があった。旬降水量は、北・東日本日本海側では多く、北・東日本太平洋側、西日本では平年並だった。一方、沖縄・奄美では少なかった。旬間日照時間は、ほ

ぼ全国的に多く、特に冬型の気圧配置の影響と低気圧や前線の影響が弱く、高気圧に覆われて平年に比べ晴れた日が多かったため、西日本日本海側、沖縄・奄美ではかなり多く、北日本、東日本日本海側、西日本太平洋側では多かった。東日本太平洋側では平年並だった。

下旬は、期間のはじめと終わりは、低気圧や前線が本州付近を通過し、全国的に曇りで雨や雪が降った所が多く、北・東日本太平洋側を中心にまとまった降水量となり、北日本では21日を中心に大雨や大雪となった所もあった。期間の中頃は、低気圧が北日本付近や北海道の東で発達し、冬型の気圧配置が強まった時期があったため、日本海側を中心に雪や雨が降り、24日から25日は大雪となった所があった。このため、旬降水量は、北日本でかなり多く、東日本太平洋側で多かった。東日本日本海側、西日本では平年並だった。一方、低気圧や前線の影響を受けにくかった沖縄・奄美では少なかった。また、旬降雪量は、西日本日本海側でかなり多かった。旬間日照時間は、北日本太平洋側でかなり少なく、北日本日本海側で少なかった。東日本、西日本、沖縄・奄美では平年並だった。暖かい空気に覆われやすかったため、旬平均気温は、北日本でかなり高く、東日本で高かった。一時的に寒気の影響を受けた西日本と沖縄・奄美では、気温の変動が大きかったが、平年並だった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り(図1)。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間			
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	
北日本					日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側			
東日本				日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側		
西日本										

資料：気象庁「1月の天候」

1 平年を上回る水準

2 平年並み

3 平年を下回る水準

(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、

入荷量は10万7259トン、前年同月比96.8%、価格は1キログラム当たり250円、同96.1%となった（表1）。

表1 東京都中央卸売市場の動向（1月速報）

品目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg) の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	107,259	96.8	93.9	250	96.1	101.4	267	240	249
だいこん	9,564	93.0	89.5	76	77.2	94.1	76	68	87
にんじん	5,993	90.7	89.8	118	102.6	100.7	129	117	114
はくさい	12,166	92.9	86.7	56	105.4	124.4	54	56	57
キャベツ類	13,736	101.3	98.6	76	77.8	86.9	75	74	80
ほうれんそう	1,568	100.8	110.0	465	82.0	82.2	489	451	464
ねぎ	4,627	84.4	89.9	321	121.5	109.8	398	296	297
レタス類	6,229	95.8	94.8	236	89.5	97.2	269	228	218
きゅうり	4,159	100.1	94.1	476	93.6	102.9	457	463	511
なす	1,376	96.1	92.2	450	99.7	100.1	403	458	483
トマト	4,891	96.6	89.8	308	87.7	94.3	263	307	360
ピーマン	1,509	102.1	102.0	614	82.6	93.8	471	641	689
さといも	439	85.3	82.9	374	119.8	115.1	404	375	359
ばれいしょ	7,091	102.6	98.3	132	98.1	87.3	128	131	134
たまねぎ	7,866	90.2	92.6	201	158.5	156.3	204	203	198

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、だいこんの価格が、前進の影響により数量が落ち着いた下旬には上昇したものの、前年を2割以上下回り、平年をやや下回った(図2)。

葉茎菜類は、ねぎの価格が、価格は中旬以降落ち着いたものの、想定していたほどの入荷増とならず、前年を2割以上上回り、平年も1割弱上回った(図3)。

果菜類は、ピーマンの価格が、中旬以降上昇したものの、高めに推移した前年を2割近く下回り、平年をかなりの程度下回った(図4)。

土物類は、たまねぎの価格が、数量不足から堅調な推移となり、前年を6割近く上回り、平年を5割以上上回った(図5)。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 だいこんの入荷量と卸売価格の推移

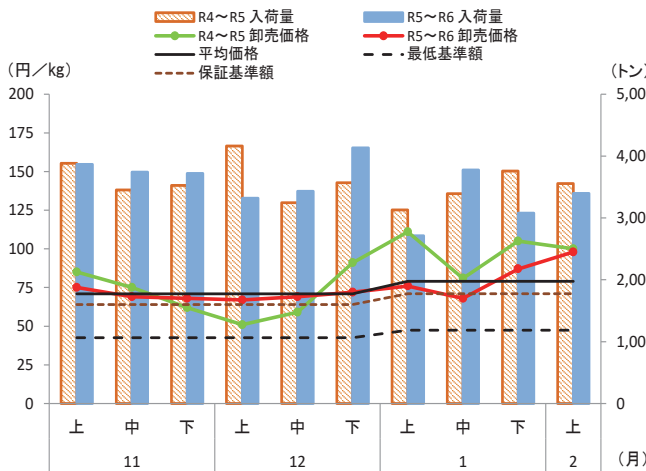


図3 ねぎの入荷量と卸売価格の推移

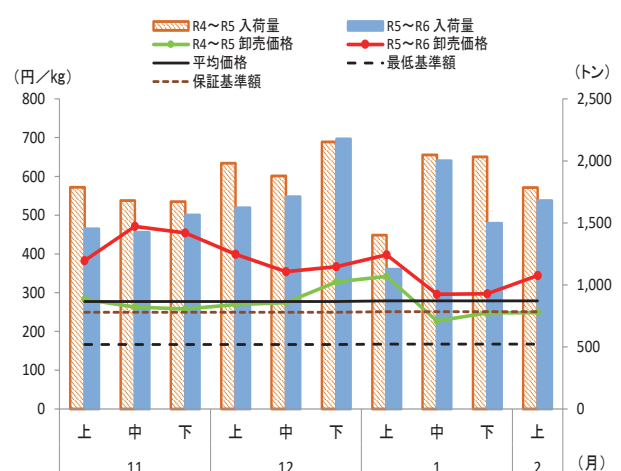


図4 ピーマンの入荷量と卸売価格の推移

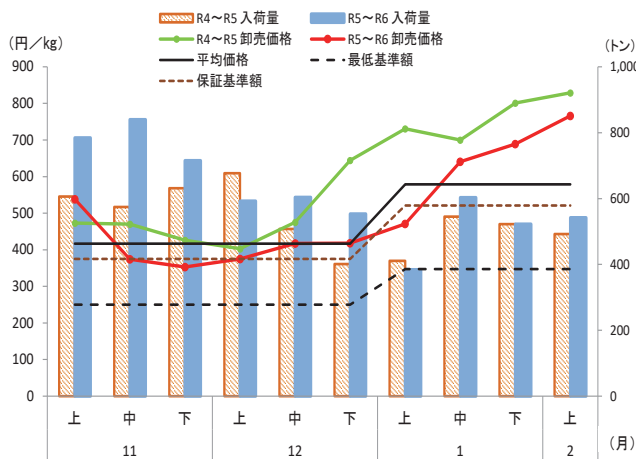
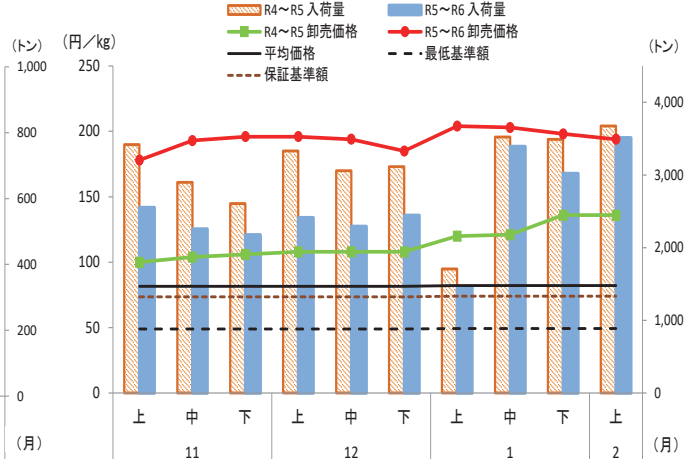


図5 たまねぎの入荷量と卸売価格の推移







資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	1月の入荷量・価格の動向
根菜類	 だいこん	千葉産、神奈川県中心の入荷となった。千葉産の作付面積は前年並みで、播種以降の天候に恵まれ、生育は順調でやや前進傾向となった。神奈川県産の作付面積は前年をやや下回り、10～12月上旬にやや気温の低下があったものの、概して気温は高めに推移し、日照にも恵まれた。10月中旬と11月中旬にまとまった降雨はあったものの、全体には干ばつ傾向となった。総入荷量は前年をかなりの程度下回り、平年を1割強下回った。 価格は、前進の影響により数量が落ち着いた下旬には上昇したものの、前年を2割以上下回り、平年をやや下回った。
	 にんじん	千葉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、播種期の高温・干ばつの影響による生育遅延は、年内の天候に恵まれたことで回復し、順調な収穫となっている。中国産の輸入が前年を6割ほど上回っている。総入荷量は前年を1割弱下回り、平年を1割強下回った。 価格は、数量が回復した中旬以降落ち着いた動きを見せ、前年、平年ともわずかに上回った。
葉茎菜類	 はくさい	茨城産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、11月の高温により生育が促進され、やや前進傾向となった。総入荷量はやや少なめに推移した前年をかなりの程度下回り、平年を1割以上下回った。 価格は安定した数量から月間を通して大きな動きはなく、前年をやや上回り、平年を2割以上上回った。
	 キャベツ類	愛知産を中心に千葉産などの入荷があった。愛知産の作付面積は前年並みで、生育時の気温が高めに推移したことにより順調で大玉傾向となった。虫害の発生が散見された。千葉産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ生育は前進傾向となった。総入荷量はやや少なかった前年をわずかに上回り、平年をわずかに下回った。 価格は、下旬に向けて底上げしたものの、潤沢な出回りから苦しい展開が続き、前年を2割以上下回り、平年を1割以上下回った。
	 ほうれんそう	茨城産、群馬産中心の入荷となった。茨城産の作付面積は前年並みで、1月に入っても気温が高く、生育が促進し、全体的に前進傾向となった。群馬産の作付面積は前年並みで、気温高により生育は順調も、一部干ばつの影響による病虫害が散見された。総入荷量は多かった前年をわずかに上回り、平年を1割上回った。 価格は、潤沢な出回りから苦戦が続き、前年、平年とも2割近く下回った。
	 ねぎ	千葉産、茨城産を中心に関東産の秋冬作の入荷となった。千葉産の作付面積は前年並みで、遅れ気味であった生育は、昨年内の天候に恵まれたことにより回復傾向となった。茨城産の作付面積は前年並みで、夏場の高温の影響により生育遅れや病虫害が目立った。その後の好天でやや回復傾向にはあったが、生育は遅れている。全体的に肥大も回復はしているものの、作柄は概して良くない。総入荷量は中旬以降、回復傾向にあったものの、やや多かった前年を1割以上下回り、平年を1割ほど下回った。 価格は中旬以降落ち着いたものの、想定していたほどの入荷増とならず、前年を2割以上上回り、平年を1割弱上回った。
	 レタス類	静岡産を中心に香川産、長崎産などの入荷があった。静岡産の作付面積は前年並みで、日中の気温が高く、生育は順調で10日ほど前進した。香川産の作付面積は前年並みで、11月中旬の降雹以降、12月中旬にかけて温暖な気候が続いたことから、生育は回復しほぼ順調となった。茨城産の作付面積は前年をやや下回り、12月の天候に恵まれ生育は促進している。総入荷量は前年、平年ともやや下回った。 価格は、前年を1割強下回り、平年をわずかに下回った。
果菜類	 きゅうり	宮崎産を中心に千葉産、高知産などの入荷があった。宮崎産の作付けは前年並みで、天候に恵まれて生育はおおむね順調となった。一部病害の発生が散見されたが落ち着いている。千葉産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であるが、一部圃場で病害が散見された。高知産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だが、気温の乱高下から圃場により樹勢がばらついている。また、昨年内からの曇雨天により病害の発生が増加している。総入荷量は少なかった前年並みとなり、平年をやや下回った。 価格は、高めに推移した前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに上回った。
	 なす	高知産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、日照に恵まれ生育は順調となった。病害は散見されるが前年より少なく、やや多めに見られた虫害も落ち着いている。総入荷量は少なかった前年をやや下回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は、前年および前年並みであった。
	 トマト	熊本産を中心に栃木産、愛知産などの入荷となった。熊本産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ生育はおおむね順調となった。栃木産の作付面積は前年並みで、越冬作はおおむね生育順調で、やや前進傾向となった。気温の低下と日照の減少により圃場により草勢のばらつきがみられる。愛知産の作付面積は前年並みで、夏場の高温の影響による生育遅延はほぼ解消されている。総入荷量は少なかった前年をやや下回り、平年を1割強下回った。 価格は、昨年末の滞留が解消された中旬以降底上げされたものの、前年を1割以上下回り、平年をやや下回った。

	 ピーマン	<p>宮崎産を中心に鹿児島産、高知産などの入荷があった。宮崎産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だが、一部樹勢の低下が散見された。鹿児島産の作付面積は前年並みで、定植後の高温の影響により、一部立ち枯れや花落ちが散見されたが、概して順調であった。高知産の作付面積は前年並みで、生育は天候に恵まれおおむね順調であったが、12月の気温が高かった影響により、樹勢の低下が散見された。病虫害については落ち着いている。総入荷量は前年、平年ともわずかに上回った。</p> <p>価格は、中旬以降上昇したものの、高めに推移した前年を2割近く下回り、平年をかなりの程度下回った。</p>
土物類	 さといも	<p>埼玉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、収穫は終了している。高温・干ばつの影響により灌水圃場と灌水のない圃場とで品質と収量差が生じていた。総入荷量は前年をかなり大きく下回り、平年を2割近く下回った。</p> <p>価格は前年を2割近く上回り、平年を1割以上上回った。</p>
	 ばれいしょ	<p>北海道産を中心に長崎産、鹿児島産の入荷があった。作付面積は前年並みで、収穫は終了している。高温・干ばつの影響により大玉比率は低い。品質劣化が多く、発芽が多発するなど、選果効率が低下した。長崎産の作付面積は前年並みで、播種期の高温の影響はあったものの、10月以降の適度な降雨により生育はおおむね順調となった。鹿児島産の作付面積は前年並みで、高温・干ばつの影響による植え付け遅れや初期生育不良が散見されたものの、その後の天候に恵まれ回復傾向となった。総入荷量は少なかった前年をわずかに上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は堅調な動きとなったものの、やや安めに推移した前年をわずかに下回り、平年を1割以上下回った。</p>
	 たまねぎ	<p>北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、収穫は終了している。夏場の高温の影響により作柄が悪く貯蔵量も少ない。中生品種に切り替わり、L玉の比率はやや上がっている。中国産の輸入は前年の2.5倍以上となっている。総入荷量は前年を1割弱下回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は、数量不足から堅調な推移となり、前年を6割近く上回り、平年を5割以上上回った。</p>

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万3465トン、前年同月比93.2%、

価格は1キログラム当たり222円、同99.1%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(1月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	33,465	93.2	95.0	222	99.1	104.9	246	212	219
だいこん	3,060	92.3	91.0	76	97.4	116.5	83	70	79
にんじん	2,099	90.4	92.5	106	89.1	103.0	111	105	105
はくさい	4,110	82.3	91.0	64	101.6	118.4	67	61	67
キャベツ類	4,442	100.9	102.8	75	82.4	95.4	75	73	79
ほうれんそう	521	114.6	112.9	450	80.6	82.6	442	429	477
ねぎ	1,024	82.0	93.4	435	110.7	109.3	510	403	424
レタス類	913	96.5	94.8	225	86.2	97.3	261	219	211
きゅうり	1,016	88.6	99.7	429	92.3	99.9	389	412	489
なす	371	91.0	101.2	427	100.7	103.6	361	443	465
トマト	1,343	94.2	99.3	292	85.9	91.8	245	291	350
ピーマン	348	101.3	107.3	594	82.8	95.3	468	603	675
さといも	116	94.3	96.9	379	125.1	122.0	408	367	375
ばれいしょ	2,657	89.1	96.1	123	98.4	84.7	119	125	123
たまねぎ	4,463	89.5	104.3	182	152.9	151.1	200	183	173

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向（大阪市中央卸売市場）

類別	品目	1月の入荷量・価格の動向
根菜類	 だいこん	<p>鹿児島産を中心として、主力の和歌山産、徳島産、長崎産などの入荷があった。量販店向けの販売は和歌山産と徳島産が主体となったが、両産地とも作付面積が減少しており、加えて作柄が悪く、産地出荷量が少ないことから入荷量は全旬とも少ない状況が続いた。業務用は鹿児島産や長崎産が主体となる入荷であったが、上旬は入荷量が少なく、中旬に増量となるも下旬には再び落ち込んだ。月間全体では前年、平年ともかなりの程度下回った。</p> <p>価格は、安い業務用向けの入荷量が増えた中旬に落ち込んだが、下旬には持ち直した。月間では前年をわずかに下回り、平年を大幅に上回った。</p>
	 にんじん	<p>鹿児島産が中心となり、主力の長崎産も主体となる入荷であった。天候不順により出荷が安定せず、上旬は少なく中旬に急増し、下旬には再び落ち込んだ。月間では前年、平年ともかなりの程度下回った。</p> <p>価格は、不安定な入荷量だったものの変動は少なく、大きな動きはなかった。月間では前年をかなりの程度下回り、平年をやや上回った。</p>
葉茎菜類	 はくさい	<p>茨城産が中心となり、愛知産や宮崎産、福岡産など各地からの入荷があった。暖冬の影響により各産地とも玉太りが良く、出荷が前進傾向となったことから、前年末に増加し、年明け以降は減少した。寒波による急な気温低下などもあり生育回復に時間がかかったため、月間全体では前年を大幅に下回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>量販店からの発注は週末くらいにしかなく、加工筋も歩留まりが良いことから在庫が多く、発注量は少ない状況が続いた。価格は入荷量が少ない中でも伸び悩んだが、需要期ということもあり、月間では前年をわずかに上回り、平年を大幅に上回った。</p>
	 キャベツ類	<p>寒玉キャベツは愛知産が中心となり、大阪産などの入荷もあった。干ばつの影響により肥大が悪く、上中旬の入荷量は伸びなかった。春キャベツも愛知産が中心となり和歌山産などの入荷があった。同じく干ばつ傾向ではあったが、中旬以降は回復して安定した入荷となった。月間全体では前年、平年ともわずかに上回った。</p> <p>価格は、大きな特売などもなく引き合いが弱かったことから、寒玉キャベツ、春キャベツとも安値安定での推移となった。月間では前年を大幅に下回り、平年をやや下回った。</p>
	 ほうれんそう	<p>徳島産と福岡産が主体となる入荷であった。干ばつ傾向ではあったが、暖冬により気温高が続き、前進出荷となったことで入荷量は増えた。一時的な寒波の影響により生育が停滞し、前進出荷した分、下旬に減少したが、月間全体では前年、平年ともかなり大きく上回った。</p> <p>量販店などでの消費は鈍く、引き合いがなかったため、価格は安値推移となった。入荷が減少した下旬に持ち直したが、月間では前年、平年とも大幅に下回った。</p>
	 ねぎ（白ねぎ）	<p>群馬産と鳥取産が主体となり、静岡産や茨城産などの入荷もあったが、主力産地は不作で需要に応えられず、引き合いは強かったものの入荷量は少ない状況が続いた。月間では群馬産が前年を大幅に下回り、鳥取産も前年をかなり下回った。全体でも前年を大幅に下回った。</p> <p>価格は、絶対量不足に加えて需要期であることから引き合いが強く、高値推移となった。年末年始の特需期を抜けて中旬以降は若干落ち着いたが、入荷量が伸びないことから下げ止まり、月間では前年をかなり上回った。</p>
	 ねぎ（青ねぎ）	<p>徳島産が中心となり、地元の大阪産や高知産などの入荷があった。干ばつの影響はあったが、暖冬で気温高が続いたことから前進出荷気味となり、結果としては安定した出荷が続いて前年並みとなった。</p> <p>価格は量販店での消費が鈍く、業務用関係の引き合いも強くなかったことから安値推移となり、月間では前年を下回った。</p>
	 レタス類	<p>ラップ物は兵庫産が中心となり、香川産、徳島産も主体となる入荷であった。裸物は長崎産や鹿児島産など九州産地が主体となった。干ばつなどの影響によりラップ物の産地出荷量が少なく、特に徳島産は月間でも前年の3分の1程度にとどまった。九州産地は暖冬の影響により比較的順調な出荷となったが、全体では前年をかなり下回った。サニーレタスは福岡産を中心とする入荷で、暖冬の影響により生育が良く、産地出荷量も多く、月間では前年をかなり上回った。リーフレタスも福岡産を中心とする入荷で、暖冬の影響により生育が良く、産地出荷量が多かったが、レタス類の荷動きが悪く引き合いが弱まったことから、下旬に入荷が減少した。レタス類全体では前年、平年ともやや下回った。</p> <p>価格は、重量野菜全体の荷動きが悪く、入荷量が少ない中でも伸び悩み、前年をかなり下回った。サニーレタスとリーフレタスもレタス類全体の荷動きが良くないことから価格は低迷した。月間全体では前年をかなり大きく下回り、平年をわずかに下回った。</p>

果菜類	きゅうり 	<p>宮崎産を中心として高知産などの入荷があった。上旬は少なく、中旬に増加した以降は安定した入荷となった。月間全体では前年をかなり大きく下回り、平年並みであった。</p> <p>中旬以降に入荷増となる中でも、燃料費の高騰などを受けて旬を追うごとに価格は上昇を続けたが、商談価格も安くならず、荷動きが鈍い状況が続いた。月間では前年をかなりの程度下回り、平年並みとなった。</p>
	なす 	<p>千両系は高知産が中心となり、長なすは福岡産と熊本産が主体となる入荷であった。各産地とも暖冬の影響により前進出荷となり、前年内に増加した反動で年明け以降が減少した。月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに上回った。</p> <p>量販店での消費は鈍く、引き合いは強まらなかったものの、燃料費の高騰などにより単価は旬を追うごとに上昇を続けた。月間では前年をわずかに上回り、平年をやや上回った。</p>
	トマト 	<p>愛知産と熊本産が主体となる入荷であった。燃料費などの高騰を受けて各産地とも作付面積が減少しており、入荷量も少ない状況が続いた。月間全体では前年をやや下回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>暖冬の中でも一時的な寒波の影響により朝晩の気温が低い日も多く、消費は鈍く販売に苦戦した。入荷量が伸びないことから価格は旬を追うごとに上昇傾向であったが、月間では前年をかなり大きく下回り、平年をかなりの程度下回った。</p>
	ピーマン 	<p>宮崎産が中心となる入荷であり、順調であったがやや前進気味で、月の後半に減少した。月間全体では前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度上回った。</p> <p>消費は鈍く、燃料費の高騰などを受けて価格は旬を追うごとに上伸するも、伸び悩んだ。月間では前年を大幅に下回り、平年をやや下回った。</p>
土物類	さといも 	<p>愛媛産を中心に各地からの入荷があった。愛媛産は産地残量が少なく、旬を追うごとに減少した。輸入の中国産の入荷もあったが、国産との価格差がそれほど大きくないため入荷量は伸び悩んだ。月間全体では前年、平年ともやや下回った。</p> <p>価格は品薄感から高値推移し、月間全体では前年、平年とも大幅に上回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>丸芋は北海道産の残量入荷と、鹿児島産、長崎産の新物入荷があった。北海道産は品質の問題から入荷が不安定で、上旬は潤沢だったが中旬に大きく落ち込み、下旬は前年を大幅に下回った。長崎産は前進出荷気味で全旬とも前年を大きく上回り、鹿児島産は中旬以降に増加し、月間では前年を大きく上回った。メークインは北海道産に発芽の問題などがあったが、新物の入荷がなかったことにより引き合いが強まり、旬を追うごとに増加傾向となった。ばれいしょ全体では前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は、北海道産は残量に品質低下品が見られたことから入荷量が少ない中でも伸び悩み、新物の産地は安定した価格での推移となった。全体では前年をわずかに下回り、平年をかなり大きく下回った。</p>
	たまねぎ 	<p>北海道産と兵庫産が主体となり、長崎産の新物が中旬にスタートした。北海道産は不作だった影響により産地残量が乏しく、入荷量は全旬とも少ない状況が続き、月間では前年を大幅に下回った。兵庫産は潤沢な出荷が続き、前進出荷の影響により産地残量が少なかった前年を全旬とも大きく上回り、月間では前年の2倍近くとなった。長崎産は暖冬の影響もあり前進出荷気味で、中旬は前年を大幅に上回り、下旬には前年の4倍以上となり月間でも2倍以上となった。月間全体では北海道産の入荷量が少なかったことが影響し、前年をかなりの程度下回り、平年をやや上回った。</p> <p>価格は北海道産の残量不足による品薄感から長らく続いている高値の影響が残り、兵庫産や、新物の長崎産の価格も高値推移となった。新物の入荷に伴って旬を追うごとに下落傾向ではあったが、月間では前年、平年とも1.5倍以上の価格となった。</p>

(執筆者：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(4) 首都圏の需要を中心とした3月の見 通し

2023年11月から2024年1月は予報通り暖冬であり、季節の進みが半月以上早かった。例年の3月は干ばつもあれば強風もあり、年によっては菜種梅雨の曇天に悩まされる。2月が干ばつ傾向となれば、全般的に春作の生育が止まるため、市場での産地リレーや作型の谷間が長くなり、野菜の価格高騰の場面が想定される。逆に多雨傾向となれば、全般に前進して重量野菜は豊作に向かうと予想される。

3月は、全国的に出回り不足となり、特に果菜類が想定より少ないため、価格は2月より上昇し、平年を上回ると予想している。

根菜類



だいこんは、神奈川産の現状は1カ月程度の前進となっている。そのため3月にはかなり少なくなると予想しており、3月中旬には切り上がると予想される。千葉産は2月に入り、トンネル物の「さわやか大根」の出荷が2Lサイズ中心に始まった。また、秋冬だいこんの露地物は終盤を迎え、中旬までとなる見込みである。「さわやか大根」のピークは3月20日～4月20日頃で、現在のところ生育順調である。大分産は高原産地であるが、秋に台風もなく生育は順調である。前進傾向で肥大化し、採り遅れの心配もある。おでんシーズンも終盤で、業務用需要の減退も気になるところである。3～4月は春だいこんへの切り換わり時期であるが、若干、端境期があると予想している。市場価格が30年前と変わらない中、資材費は3倍となっていることから、産地は苦しいところである。

にんじんは、千葉産は例年どおりの出荷ペースで、特別前進はしていない。3月に入り徐々に減りながら推移し、3月いっぱい切り上がると予想される。Lサイズ中心で、品種は「ベータ系」であり、出荷量は平年並みと予想される。徳島産は3月20日前後から出荷が始まり、ピークは3月下旬から4月上旬と予想される。一部干ばつで播き直したが、不作にはならず平年作と予想される。Lサイズを中心に、品種は「彩誉」である。

葉茎菜類



キャベツは、愛知産の秋冬キャベツの1月までの出荷実績は、ほぼ前年並みである。1月末の降雨により干ばつは解消され、2～3月も前年並みの出荷と予想される。3月いっぱい出荷のピークが続く見込みで、大きさも8玉サイズが中心で平年並みと予想している。千葉産の現状は前進出荷が続いており、2月下旬から減り始めると予想している。3月には現状の70～80%程度に減ると予想している。再び増えるのは「本春(201号)」が始まる4月15日頃と予想される。神奈川産は適度な降雨もあり、3週間程前進している。「本春」は例年より早めの2月に出荷が始まって、3月下旬から4月上旬がピークになると予想している。3月としては前年を上回ると予想している。

はくさいは、茨城産の春はくさいは例年よりも早く、3月上旬から出荷が始まると予想される。現在出荷されている秋冬物のピークは、前年内から年明けにも続き、2月中旬にほとんど切り上がると予想している。下旬に出荷できてもかなり少ない見込みである。兵庫産の3月は圃場からの収穫物と貯蔵物の両方の出荷となるが、作付けが増えて前年を上回ると予想している。それでも2月に比べれば70%程度になると予想される。圃場からの物は中旬まで、貯蔵物は3月いっぱいまでと予想される。

ほうれんそうは、群馬産の現状はやや前進気味に推移している。2月に入り、春作や他品目に切り替える生産者も多く、やや落ち着いた展開になると予想される。2～3月と減りながら推移し、5月以降はほうれんそう専作の生産者のみの出荷になると予想される。3月としては前年並みかやや減を予想している。栃木産は1月に入り伸びが悪く、現状は例年を下回る出荷となっている。年内に暖冬で前進出荷された影響もある。2月に入って降雪の予想もあるなど、回復は早くて2月下旬頃と予想される。3月も天候に左右されるが、播種は続けられており、前年並みを予想している。

ねぎは、埼玉産の現状は前年より減っており、11月以降の降雨が少なく、細身で丈も短めで

ある。秋冬物のピークは終わり、現状は少なくなっている。増えるのは春ねぎが始まる2月下旬から3月中旬で、4月にピークとなり、5月には切り上がると予想される。千葉産の秋冬物のピークは3月いっぱい続き、さらに3月20日からは春ねぎも始まると予想される。3月の収穫量は豊作であった前年を下回ると予想している。茨城産は前年内までは少なかったが、好天が続いたこともあり、現状は平年並みの出荷となっている。3月は秋冬物の残量と春ねぎとなり、3月いっぱいまとまった量で入荷すると予想される。4月は初夏物も始まって、潤沢な出荷ペースを維持できると予想される。

レタスは、兵庫産の現状は厳寒期で減少しているが、2月後半から3月初めにかけて増えてピークを迎えると予想される。生育は順調であるが、もう少し雨が欲しいところである。香川産は暖冬で乾燥しており、一部歩留まりが悪くなっている。特別ピークはないが、3月はある程度出荷され、4月には少なくなると予想される。作付面積が減少していることから、前年の90～95%程度とやや少ない見込みである。静岡産の現状は7～10日程度の前進となっており、この影響により全般的に切り上がりが早まり、3月中旬にはかなり少なくなると予想される。3月は量的に前年を下回り、2Lサイズ15玉中心の出荷と予想される。長崎産の冬のレタスは3月までで、引き続いて順調に4月初めから春レタスとなる見込みである。引き続き一定のペースで出荷され、肥大は良好で、3Lサイズ12玉中心と予想される。

果菜類



きゅうりは、群馬産の生育は基本的に順調であるが、寒暖の差が激しく、生育にやや時間がかかっているとの報告もある。年明けに定植したものが出揃う3月初めにはピークとなると予想される。宮崎産の現状は生育が順調で、例年より多く出荷されている。現状までは気温高で推移し、夜温も高めであった。2月に入り天候が乱れ、2月前半の出荷は減る可能性がある。中旬後半から下旬にかけて増えて、3月に最大のピークが来ると予想される。埼玉産は2月中

旬から始まるが、無加温物が始まる4月に入ってからピークになると予想される。現状は順調で、3月は増えながら推移すると予想される。

なすは、高知産は寒さの影響で肥大が遅れており、2月中旬まで出荷は伸び悩むと予想している。下旬に入り増え始め、3月には増えながら推移すると予想されるが、同時期に一気に出荷が集中することも懸念される。福岡産の現状は最も出荷が少ない時期であるが、2月中旬頃から増え始め、3月、5月のピークに向けて増えながら推移すると予想される。作付けは前年並みで、天候にも恵まれれば平年と同様の展開で推移すると予想される。

トマトは、愛知産の3月は長期物の中盤を迎え、好天で順調ではあるが、2月の初めの段階では少なめの出荷となっている。2月中旬から増え始め、4月下旬が最大のピークと予想される。熊本産の前年内は遅れ気味に始まって、12月に入り増えてきた。年明けも安定して入荷したが、2月中下旬に出荷予定のものが着果に不安があり、出荷が伸び悩む時期もあると予想される。ミニトマトは3月上旬まで少なく、中下旬から4月初めにかけて増えて、ほぼ例年に近い展開と予想される。佐賀産の「光樹^{こうじゆ}トマト」は、1月13日から出荷が始まり、3～5月がピークと予想される。作付けは前年並みで、中心サイズはMであり、品種は引き続き「サンロード」である。栃木産の冬春物は現状始まったところで、越冬物は、前半の途中段階である。2月は大き玉が多く前年を上回るが、3月には前年並みに落ち着くと予想される。日照時間が長く、さらに暖冬により生育は順調である。本格的に増えて来るのは5月下旬からで、両作ともに6月いっぱいまでと予想され、3月としては前年並みの見込みである。千葉産の促成物は3月が折り返し地点で、最終は7月と予想される。生育は順調であるがやや前進気味である。品種は「かれん」で、大きさはMサイズ、3月としては前年並みの出荷を予想している。

ピーマンは、茨城産はハウス物となり、生育は順調である。当面のピークは4月下旬から6月上旬で、3月は増えながら推移すると予想される。作付けは若干前年を下回っている。高知産は病気も見られず生育順調であるが、市場価格の低迷が懸念材料である。現状はそれほど寒

くなく、3～4月にピークを迎えると予想される。気温が上がると出荷量が増えるのは確かだが、一方で腐敗などが出やすくなるため、寒い方が安心なところもある。

土物類



さといもは、埼玉産の出荷は4月いっぱい、5月には出荷されてもかなり少ないと予想される。2023年産は平年作であり、3月は2Lサイズを中心に前年並みの出荷を予想している。

ばれいしょは、鹿児島産の現状の早春物は2月いっぱいとなるが、天候に恵まれ豊作で、2Lサイズ中心と大玉傾向である。春ばれいしょは例年より早く3月下旬から始まると予想される。現状は天候の問題はなく、引き続き豊作と予想される。長崎産の春ばれいしょは4月初めからとなるが、本格的に多くなるのは5月に入ってからと予想される。作付けは生産者数の減少により前年を下回っている。品種は「ニシユタカ」が中心で、そのほか「アイユタカ」「さんじゅう丸」があるが、それほど増えていない。北海道産の2023年産「男爵」は小玉傾向ではあるが、収穫量としては平年作である。3月には少なくなり、4月中旬まで出荷できるが、例年よりもペースが早いと予想される。中心サイズはM寄りのLである。

たまねぎは、北海道産の現状は例年と同様のペースで出荷されているが、量的には90%程度と少ない。2～3月も同様に少なく、例年と同様の5月いっぱいまでの出荷と予想される。サイズはL大とL中心である。兵庫産の市場出荷は4月に入ってからであるが、本格出荷は5月初めからで、3月の極早生の市場出荷はかなり少ないと予想される。佐賀産の例年は3月中旬から極早生物となるが、やや早まる可能性もある。このピークは4月上旬で、早生は4月中旬から始まると予想している。現状生育は順調であるが、今後の天候の変化も注視する必要があり、今後降雨が多ければ、大玉傾向となり、安値となると予想される。

その他



ブロッコリーは、熊本産は2月初めの段階で2週間程度前進しており、例年は4月初め頃に谷間ができるが、今年は3月下旬に出荷の谷間があると予想している。春ブロッコリーは4月下旬に再びピークが来ると予想される。香川産は2月中下旬にピークが来て、3月に入り減ると予想され、3月は前年並みの見込みである。4月後半から5月の大型連休頃に再びピークが来ると予想される。愛知産の現状は10日前後の前進となっており、3月の出荷物は早めに切り上がり、前年を下回ると予想している。春物は4月中旬から5月上旬がピークとなると予想している。埼玉産の秋冬物は、10～20日程度の前進となっている。年明けは気温高の後に急に寒くなるなど、寒暖差が激しかったため、2月に入っても急増はないと予想される。春物は3月20日過ぎから増えてきて、4月に入りピークとなると予想される。

アスパラガスは、福島産は会津地方の産地からとなり、3月中旬から始まって、ピークは4月初めから中旬の見込みである。前年の夏の干ばつにより株はやや弱いと予想している。春物は平年並みの出荷を予想している。長崎産の出荷は1月末から始まり、2月下旬から3月初めにピークが来ると予想される。ハウス物と露地物の両方であるが、4月いっぱい一旦切り上がると予想される。

グリーンピースは、鹿児島産の前年は、1月に積雪被害があったことにより不作となった。今年は例年より10日程度早く3月下旬にはピークとなると予想される。天候に恵まれ、豊作傾向と予想している。

そらまめは、鹿児島産のハウス物は現状始まっており、2月にピークが来て、3月に入り少なくなると予想される。露地物は例年より4～5日早く、4月の初めからと予想している。少なかった前年より多いが、生産者の高齢化により作付けは減っている。

さやいんげんは、沖縄産は11月からハウス物が始まっており、3月に入って露地も始まることから増えて、4月までピークとなると予想される。今年の作は定植時期の高温によりハウス物、露地物ともに作付けは減少している。

かぼちゃは、沖縄産はほぼ平年並みに始まっており、年内からの天候に恵まれ順調である。ピークは2月中下旬から3月いっぱい、5月までと予想される。5玉・6玉サイズ中心で、品種は「栗系」である。

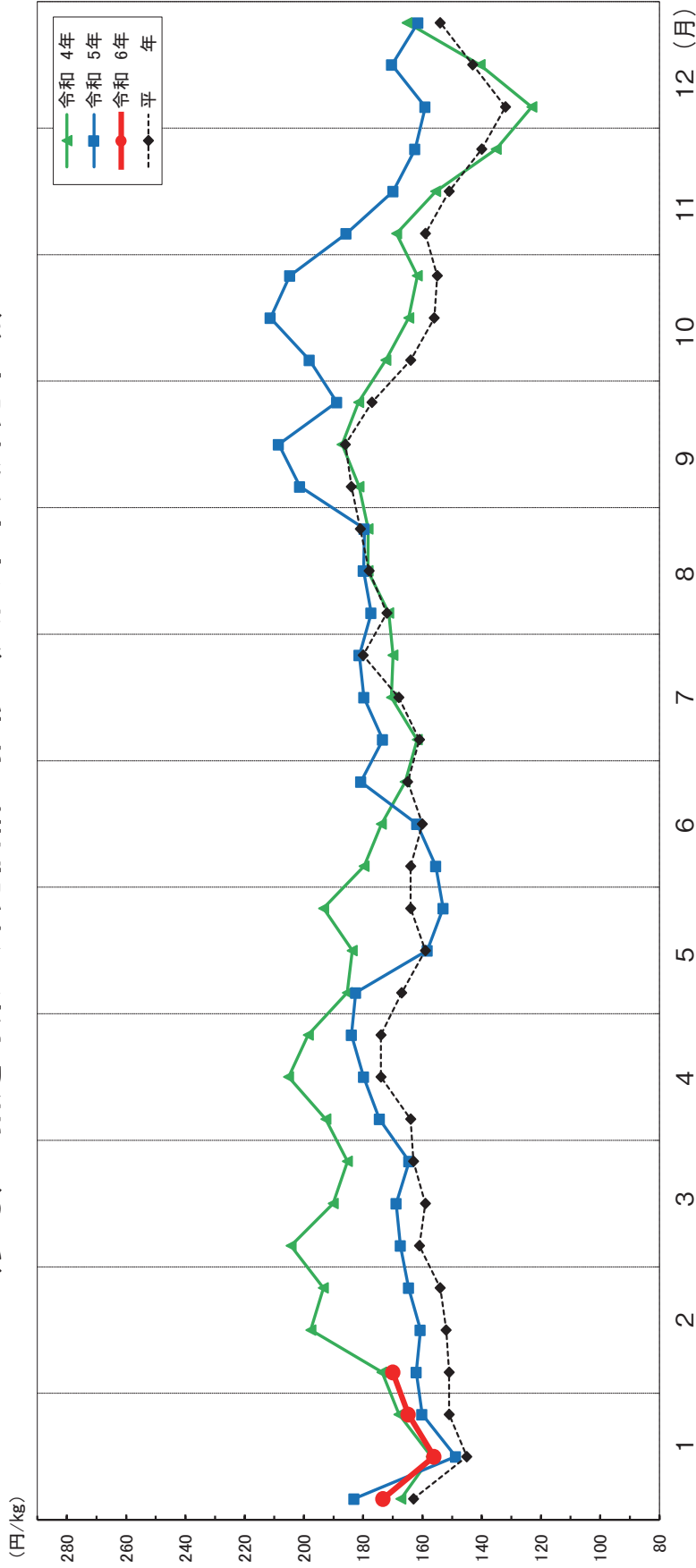
ごぼうは、熊本産は洗いごぼうの「菊池水田ごぼう」であり、12月に始まった冬ごぼうと、3月25日から始まる春ごぼうの二つのタイプである。冬ごぼうは、昨年夏の干ばつの影響により例年の70%と少なく、3月いっぱいの出荷と予想される。春ごぼうは、4月末から5月の大型連休頃がピークだが、冬ごぼうに作付け転換した圃場が多いことから、前年を下回ると予想される。

かんしょは、茨城産は2月いっぱい「べにゆうか紅優果」の出荷は終了し、3月初めから「紅まさり」となる。2023年産はやや小ぶりに仕上がったが、出荷は例年並みである。「紅あずま」は5月以降の予定である。

たけのこは、静岡産はほぼ平年と同じタイミングの3月10日前後から出荷が始まると予想される。ピークは4月中下旬で、4月25日の出荷で切り上がる見込みである。今年は表年おもてとしで、前年を上回る出荷と予想される。

(執筆者：千葉県立農業大学校
講師 加藤 宏一)

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月													
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬												
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169	156	135	123	141	165
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173	180	181	177	180	180	201	209	189	198	211	205	186	170	162	159	170	161
令和6年	173	156	165	170																																
平年	178	158	159	163	165	165	168	158	161	156	167	167	158	155	161	160	155	159	157	167	184	175	182	183	183	183	176	164	148	151	157	146	134	128	136	153

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（平成30年～令和4年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。